岡田三郎助の描く女性像の軌跡

柳　場　恩

岡田は三郎助は幼いころに画家に憧れ、画家を志すことが認められてから70歳で亡くなるまで、たな絵の展開を求めていった。洋画を学ぶには恵まれた環境にあり、黒田清輝、久米桂一郎、留先ではラファエル・コランから直接指導を受けるなど、指導者にも大変恵まれていたといえる。特女性を描いた作品では伝統的な日本の風俗を外光表現を用いて描き、独特の画風を確立している。の教えを理解し守る一方で、日本的なものへの回帰というさらに新たな段階へと進んでいった。晩にかけても岩絵具を用いる作品を発表するなど、自らの制作に対して並々ならぬ情熱を感じさせ。また東京美術学校、本郷絵画研究所など洋画に関する教育研究にも取り組み、その功績が認めれて第一回の文化勲章を受賞するほどである。近代日本の洋画界では、岡田の師にもあたる黒田輝や、東京美術学校西洋画科に学んだ青木繁にスポットライトが当たりがちだが、岡田が果たし役割、画業においても注目すべき点は多々あると思われた。

作品の具体例をあげると《婦人像》（紫調）では依頼者、髙橋氏の意向と作者自身の画風とが一したことで、日本的な要素を前面に表現している。後にはポスターとして使用され、《桜狩》や《紅葉狩》など看板として描かれたものもあり和服に対しても造詣の深さを感じさせる。きものは論のこと、半襟や帯それに伴う装飾品に至るまで、それぞれの持つ質感だとか色調を細かく表現している。また《ダイヤモンドの女》では、好景気に沸いていた当時の世相も反映し、日本の伝統ともに外光表現で調和のとれた画風を表している。《あやめの衣》では上にあげてまとめられた髪のおかげで、くっきりと見えるうなじ、ほんの少し頬が見え、ぽっと色づいた耳など、日本の女性のもつ美しさ、甘美な雰囲気を画面全体から醸し出している。金地の背景を用い余分なものを入れないのだが、効果的な構図で見事である。衣装は藍色と赤が鮮やかな中に白いあやめの花が咲いている、浴衣のようなきもので、はだけた感じが絶妙である。《支那絹の前》や晩年の作品からは、“ものずき”という文章で岡田自身も語っていたように、“裂”に関する深い造詣がよく表されており、その影響も大きいことが窺える。晩年の代表作《婦人半身像》は、やはり当時の流行を反映して中国の女性の衣装を用いている。このような点からも岡田が服飾を重要視していると考えられる。

明治から昭和初期にかけての服飾史についても触れたが、当時の流行の一部分に焦点をあてたに過ぎない。岡田の作品に見られる衣装との具体的な関連性、いかに制作に影響を与えたのかという点においては、より詳細に当時の服飾史について分析していく必要があると思われる。岡田三郎助という画家、彼の描く女性を、当時の流行した服装といった服飾史的な観点から分析することで、新たな見解を追求したい。